# 七多羅樹

全

# 茶墨一家

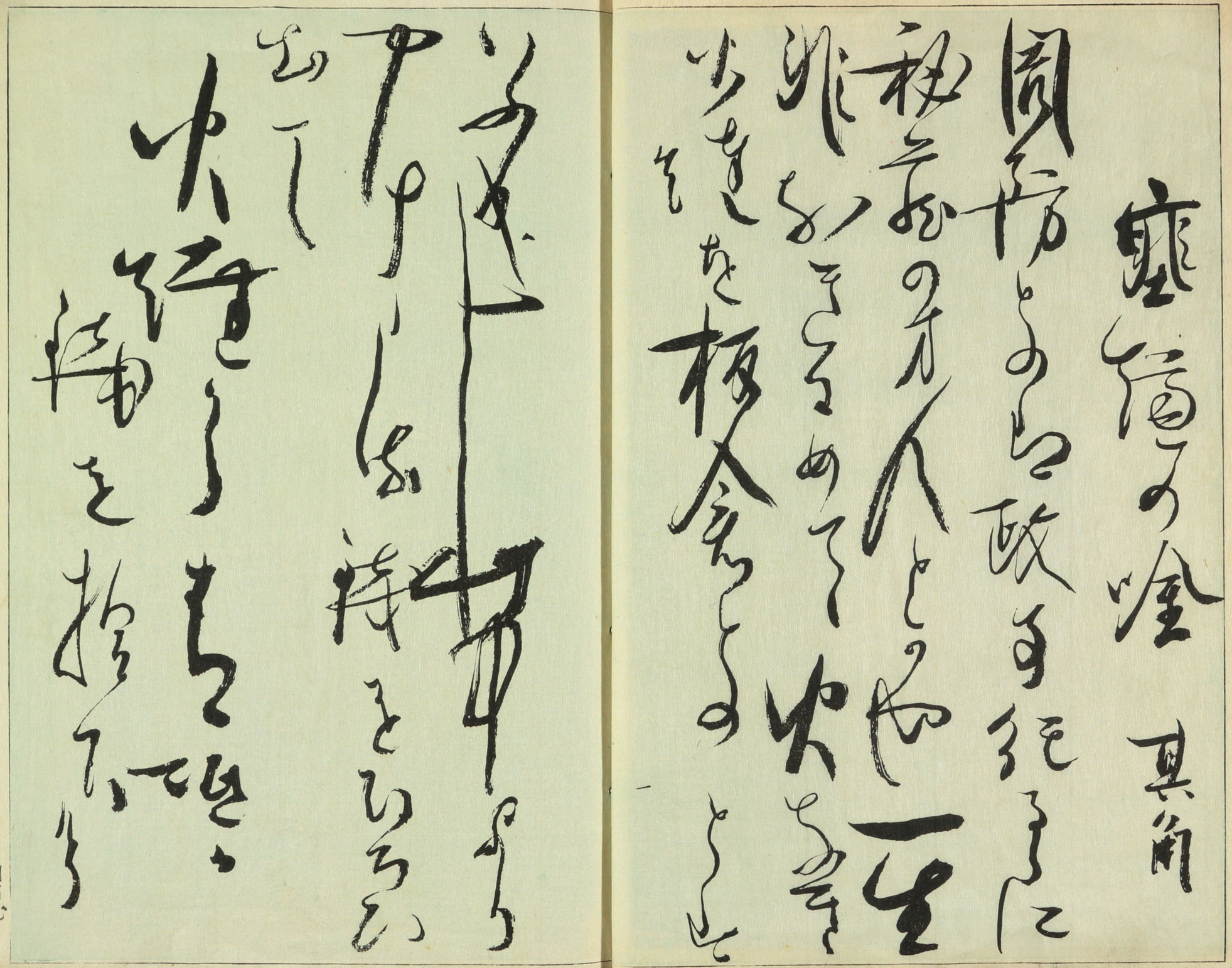
丁酉蘭秋

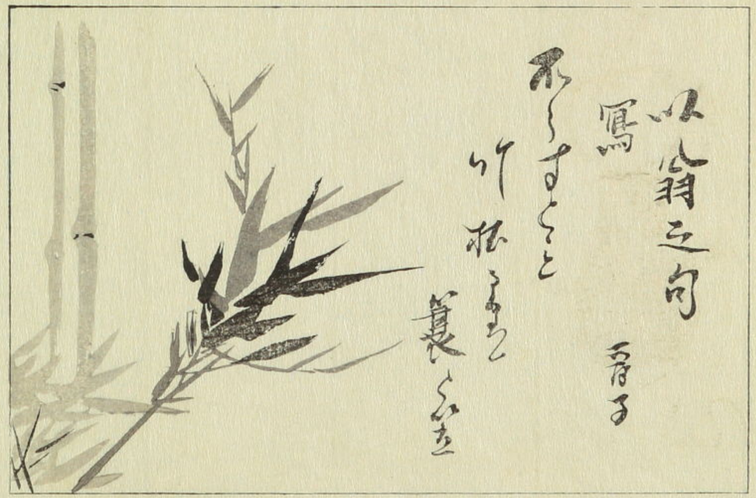
八千房無量壽

金井美和書

八百妻天滿天神

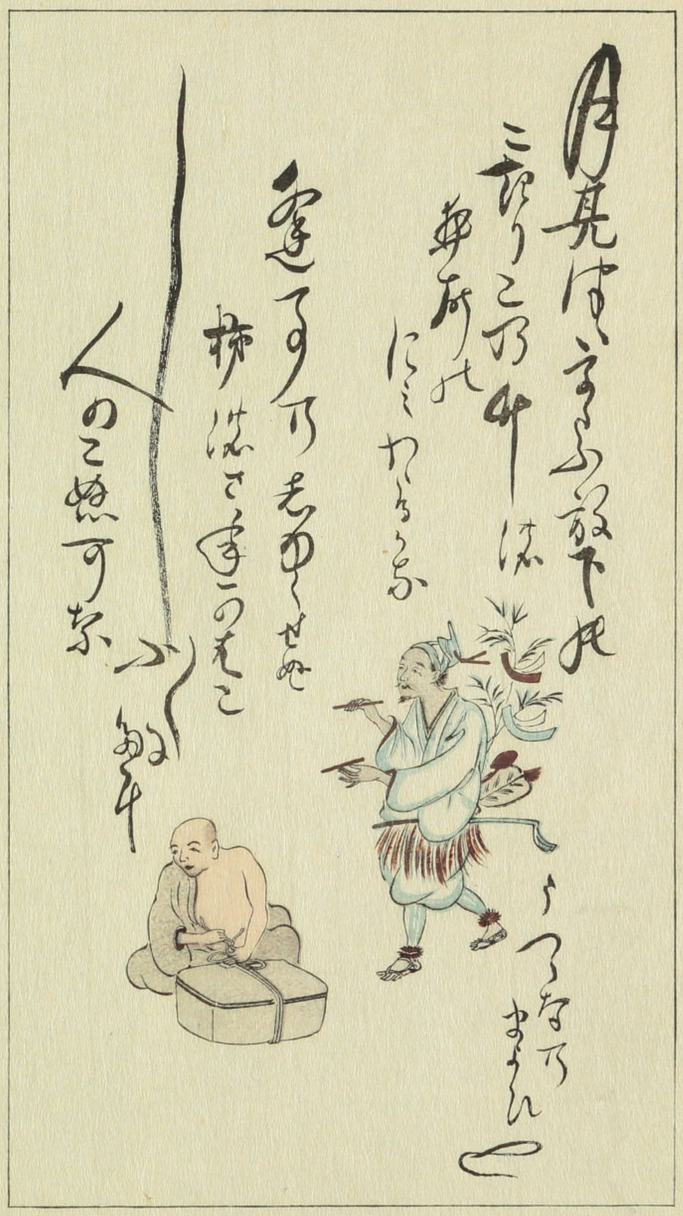
文化元年什





桑田氏藏

伊沢所藏





梅有亭

[illegible]
花つゝ[illegible]
[illegible]
[illegible]
二条井[illegible]
[illegible]
[illegible]
一[illegible]の鳥[illegible]
[illegible]



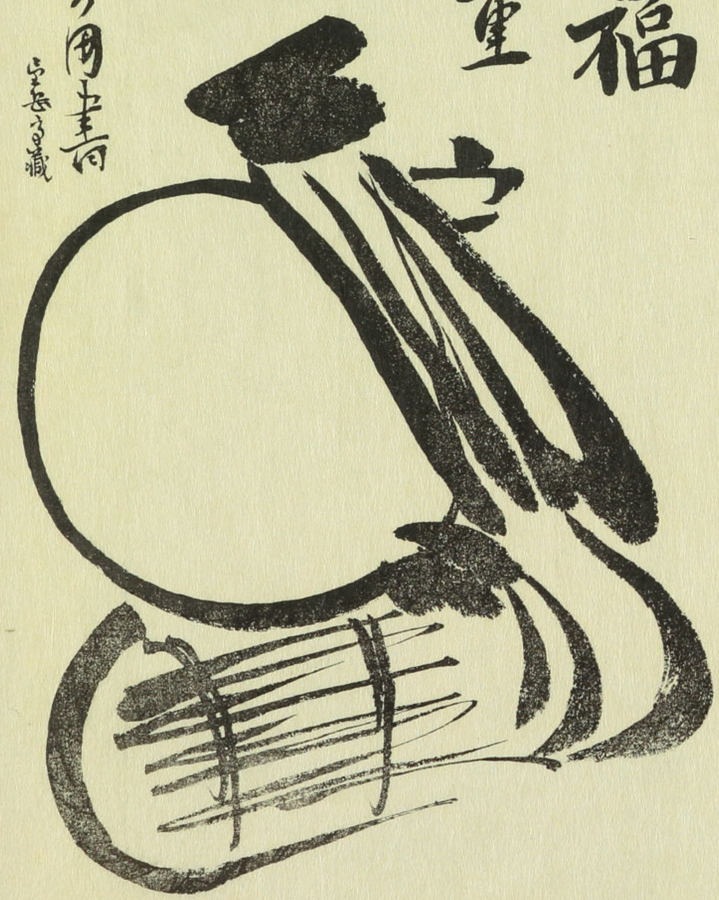
[illegible]
[illegible]
羽[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

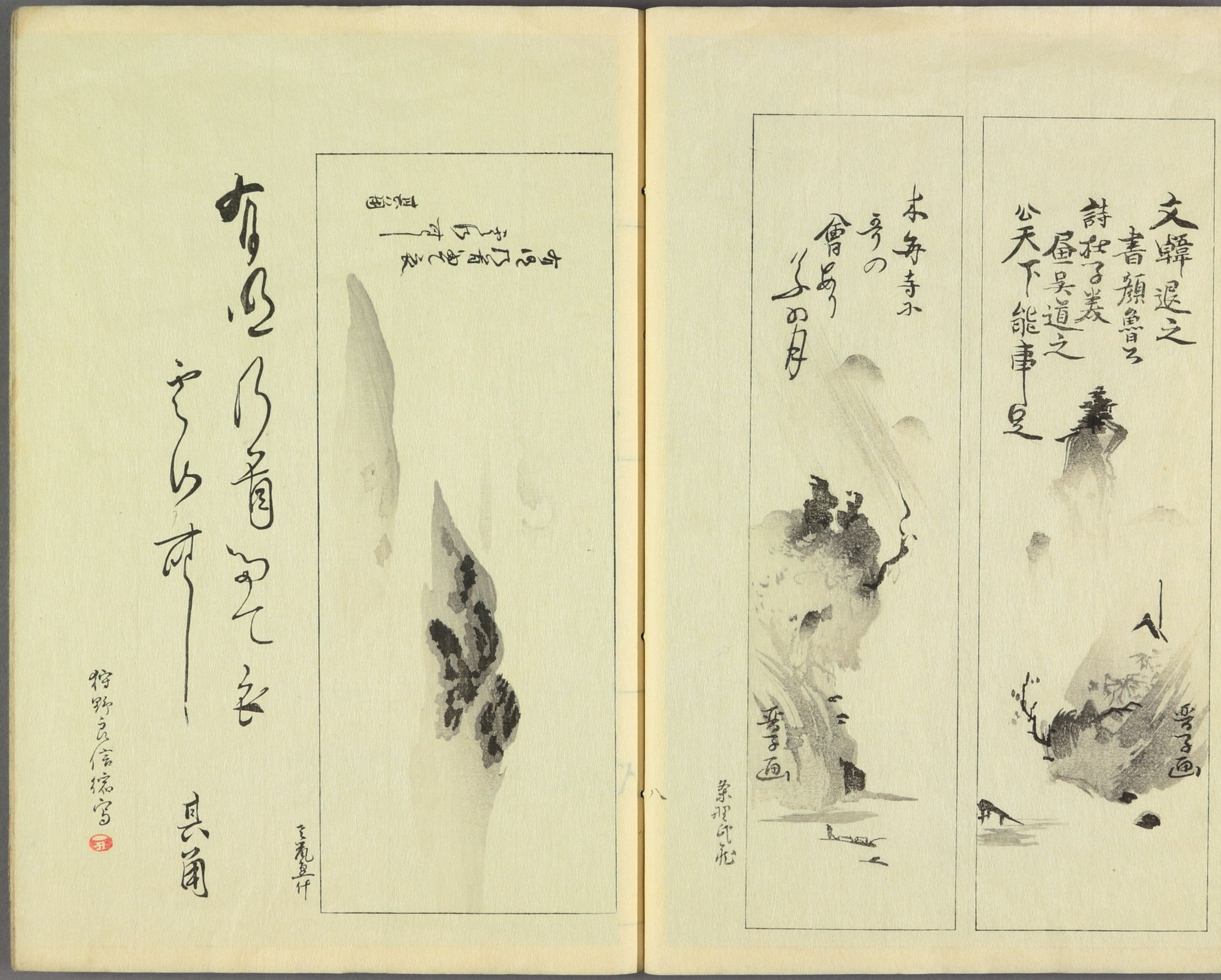
錦あやめ　色のかりの　老男

大士垢者表之材也
袋之所材也物之所
之法材也心王之也
中之所物之蓮華
泥也



經曰　受持法華
名者福
不可量




文韓退之
書顏魯公
詩杜子美
畫吳道之
公天下能事已
未每寺小
會昌
子の母
真蘭
牧野良信寫

洛陽物名記　其角

清水
昔ならぬ雪の岸なの
日なしは

仁和寺
御室のやく木
なかし桜

高雄
竹ちる都かな
のこるもみぢ
京の人ふかき
西の寛

北山
昔ならで
鼻の[illegible]

八幡
[illegible]
男山

淀
[illegible]一二の[illegible]
[illegible]

宇治
[illegible]

伏見
[illegible]

[illegible]
[illegible]

二条[illegible]京乃東
[illegible]京[illegible]
[illegible]

宝晋斎其角

八千房竹

[illegible]

[illegible]

今おんさくる百可[illegible]
天和貞享乃書とも[illegible]
[illegible]竹

あまつかけとは雨雲雷鳴の声　甚角

おとうつるれ　時乃歌　彫棠

雷を祝ぬるみて　衣通　鼎山

いつかを碎　乃出雲　角

てるてる　月　川筆海　棠

伊勢のくる　曲乳　鈴乃　首山

生花　鈴の　くるくるとかみ　角

芳紙　おるして　かるる　宝　棠

末　鈴　浮世　明　心

姉ふる　鈴　やく　こえ　角

星　人　川　雨　屋　棠

に　ぬく　ふる　雨　心

鈴の　鈴　ふる　声

鈴の　鈴　物　竹　角

月　ふる　坊中　竹　棠

涼しくも乳湖てやる蝉の声　山
よきかしらしれ所に菊の色　角
菊植や清流水涼ん汁所　来
蝸牛ハもしるかる梅の座木　山
ニ
まゝ山は脊(セナカ)をたける傍達し　角
蜘(クモ)のゐのかゝる所を踏越　来
ちらと雨なからは岩をしる日も　山
血のつく鰹尾をさけて其　角
二所の手寺衆子見しらして　来
噂の塚をすゝん梅の手　山
しらされ法のちらとその家　角
なりけりて　かへ火杉も　来
こゝろしきものゝ秋もなし川直し　山
深月の神な人をあるふ　角
武士の甲殿もえみつれ越度　来
芝ふ袖しらふ月かも絆　山

明治十九年八月二日於生池院法會修行

法華三昧

導師　養壽院權僧正榮海

衆僧東叡山大衆

大僧都三人　權少僧都　至拾口出節

伶人　五名

[illegible]

獻茶式　一堅　中有金人

晋書曰翁遊福之能諧

ちりぢり霊芝を然して東閣の客人を詣ける

もの茶屋の酌に敷ものとして水蓮をなす　其角

百韻

蓮の葉に沼のなまめく水の筋　雪人

雨ぞ降る夏の夕暮　柳一

夏来ぬと気配の沼に浮草し　桂雪

こぼれ咲く蓮の花の涼しさ　孝雪

有職の拍子凝りしもしし　素丸

夏しめりけの拍子浮草

三月の長閑の童　砌

ゆゆ陽の力の松を離れて　蕉好

四向の豆腐屋の笠の間　負松

屋下しりの蓮の掬の水　松悟

貝軍ぞ飛び川上の　桂月

二世の夢を知る一言　桃仙

月性の人の間のしらみの迹　梅韋

嵐雪の市の冠せる　素扑

乾河の雷鳴の舟の河底の　白笑

阿蜜長の吉備の聖の　指丸

末月

呼こえも振手ぬ秋の生鰯　清魚
吹かけ雨の尺のつらし峰　木葉
船宿ゑたるに立ちし道行に　一樹
囲者ある様うらみし道　湖帆
室井の濡もたち参りしき荻　室井 晋阿
茶たてこゝろみる月もの影　永乃
伯楽は猿の顔の凛として　梅戎
糸肉よき桃おれ也　金桃
嘆き笠の衣のまゝの蓑衣　遊民
此つまる木曽もみ水聴しの池　笠仙



舞たまふ日ことに三天寺雪に滝　箕香
隣稀葉しる毛がそ忠き　三松
声墨り茶眺の日ひのちそきし　枚唯
土橋つきまりはかすね鐘鼓　赤城
遊人のこゝろもかよふもれし声　梅甫
宗祇の情も文箕輯公　市川 三升
瑞溪は花もしれの女よし　卓楽
夜しきのふらた陰まかせ寺　河月
此のよいおとこ僧のとも寒　正哉
鬢眼のさえる秋の何面きし　呉甫

逼塞の後て祈も細しく
蓋の掃除する女もけ
臘梅や又咲つゝ公家小屋
門さす者の馬や横京
樽田川を張る舟や鳥
冬ゆ一枝のこゝの赤唾
味噌蔵ならぶ花の巡
子の初遊ぶ女の軸もて
杖しまる君いとの金の月
造化の雲を地といつも

青芭　雨
綾小　吐雪
白雲　梅年
櫻知　梅枝
靜和　雨是
仏外　歩壬
蓼仏　室珠
一歩　晋保
崔志　梧弥
雲仏　きゝ



高霜の小山の宿　積
縣の代る　杭ゝ
明て昔の花の月
を抽す春の是二百年
雲ゆ一驟行のみ
投を持て同下結機京
旅立て縁の切目　知
初風に黄ゝ　ゝ
雲す庭木　傍
作り　道乃　結て

松飾は篠の所々にまきし柳かし　松谷
禅の弟子乃責むる山里　之堂
雷は數物稲さへ世をも世をも妹　安山
月は鬼の布ゝかし　磊山
中頃は文六の太乃穴巾し　千羅
名の木めかしちり梶の海ろく　晋古
言ぬ事ある味みんすま荒れ所る　知石
物見る白き丹前も着る　芳秋
ウ
賽錢は灘方の鄙めけるん　宝仙
作三寸德利を稀なれ　吉我
有て恥よ毎の世帯の気色ゆ　去年
空ゑも恥ん毎ゝの雨　松外
物言ぬの松の其ゝも揺るかぬ　機石
立星も望停ゝりつき関白　蜂虫
兵法は事は入土器の歳の暮　多松安
松ゝ汁ても七ゝ桶の盃哀　松安
しらさの事は弾道山は暮し　文蛙
りきつきよ恥ゑぬをらの金　松色
七宗の喉を七なり総活所　不及
作室行ゝの春の丁寧　松関

稲妻のやうにまとひ櫻なる　秋篠
以地蓋の卦　乃ち火　宣

下略

一列門葉のまとれに不家乃言葉

尚方向

蓮乃面　法華経の書乃水
法の指とも蓮の華　紅
乃浪乃折乃蓮の上

普風一列
雪人
正義
惠好



言葉乃ゆゑの蓮の忘日乃
乃ゆゑ立乃ゆゑ　蓮の
蓮白　昔の月乃出　一乃
乃ゆゑ向まちす　二百二佛
竟乃ゆゑ　乃　池の蓮
月乃中乃ゆゑ　佛　乃
蓮乃蓮　元寂　乃ゆゑ
大海乃　はちすの時乃　日
室戸の清水乃　二百年
蓮の花蓮乃忘日乃竟乃ゆゑ

平雲
孝基
素正
操志
松柏
指正
櫻知
操安
梅道
春姫

蓮の葉に宿る露は曾可なり
白蓮のもめでたくこそ見ゆれ　信濃　金桃

咲くとても蓮の実成るこのよ
宮井の月に見る新しき　因幡　推外

二百年
ちりそめし白蓮白し水青き　下毛　嘉山

恵舞ふ蓮の上に蓮華の数　伊勢　采女

はかなや蓮の暗蓮の
二百年ちりぬ蓮華の法華経　西京　雀志

白い蓮　我俳諧も蓮の高　不白軒　梅年

長崎　梅我

長崎　紫苑

二百年ちりぬ蓮の白い蓮
古池や蛙とびこむ蓮の白い蓮　西京　稲野

豊後　吹蕭

三つ子の母　新しき月
花と咲く　晩霞　上行寺　八幡　文仙

蓮の花　二百年　公美

蓮の花　清水

蓮の花　小虎

蓮の花　戒名　瑞雲　紫心

蓮の花　蓮の花　美風

梅の花　梅の花　雅雨

園に春のこもりて梅の花　八幡房　長海

雪と見し　はるかに山の　長盛

元郷の伊勢　みてる櫻　長水

那須の山の花の雪　指南　雪南

たにたり　梅　柳　柳涯

乃水　乃水の余波の下　乃水

閑如　春　春濤

其角　乃水　樂之

草花　こころは　経机　紀末

師　物　遠　且晋　捨一門

寒　梅　晋仙列侯　梅甫

蓮　蓮　静和

伊勢　七多羅樹　永機

三都及諸國の門の吹迫剋

誠敬安養化主彌陀必來十方三世
應正等覺者平等大慈妙法蓮華
經等八万十二權實聖教觀音勢至
諸大菩薩海迦葉阿難諸賢聖衆經
極樂界會九品蓮臺清淨大海衆
塵刹土現不現前三寶境界驚白
而言　夫此歡喜踊躍念佛謂

空也上人竊蒙加茂大明神北尾
大明神神勅為天下泰平國家
安穩五穀成就萬民豐樂仍願
晉　其角居士二百回忌
螺　鼠肝居士五十回忌　追福
往生極樂勸都鄙諸類歡喜踊躍
六齋念佛勸進應鉦響結緣男女

合掌歡喜流涙市中闘道場隨聲
奉唱阿弥陀如来二十五菩薩
来臨擁護乃至元量元邊菩薩
聖衆春屋圍繞
明治廿九年八月二日勤行於東台
西麓池院

閑東空也門徒敬白

明治三年六月九日出版御届同七月十五日出版

編輯兼発行者　晋永機　芝公園八号第二番地

印刷兼調製者　伊藤竹次郎　神田金沢町九五番地

發賣人　松寿半造　浅草区須賀町十九番地